
ター君とチーちゃん

陣内翔

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

ター君とチーちゃん

【Nコード】

N0136C

【作者名】

陣内翔

【あらすじ】

四歳になったター君は、五歳になったチーちゃんと仲良しです。近所だからなのか、幼稚園が一緒だからなのか、どんな理由なのかは判りませんが、毎日のように一緒に遊んでいます。しかし、別れというザンコクな出来事は、いつも突然にやってきます。

四歳になったター君は、五歳になったチーちゃんと仲良しです。近所だからなのか、幼稚園が一緒だからなのか、どんな理由なのかは判りませんが、毎日のように一緒に遊んでいます。

外で遊ぶなら一緒に公園に行つて、ブランコに乗つたり、鉄棒をしたり、スベリ台をすべったりします。

家で遊ぶなら一緒に座つて、幼児用のオモチャで遊んだり、トランプをしたり、テレビを見たりします。

二人はそれほどにまで仲良しでした。

ター君とチーちゃんは、毎日がこのまま続くと思つていたし、二人の親達もこの微笑ましい生活が、いつまでも続くと思つていました。

しかし、別れというザンコクな出来事は、いつも突然にやってきます。

ある日からチーちゃんが、ター君の前に現れなくなつてしまったのです。

ター君はしばらくの間、チーちゃんは風邪をひいたんだと思ひました。ター君も風邪をひいた時、何日もお布団に入つていた事を憶えていたからです。チーちゃんは風邪をひいて、お布団から出られないんだ。そう考えたのです。

しかし、何日経つてもチーちゃんは、幼稚園にも、一緒に遊ぶ公園にも、現れません。

さすがにター君もおかしいと思ひ、チーちゃんの家に行きました。チーちゃんが風邪をひいていても、これなら会えるだろう。そうとも考へて。

チーちゃんの家に着いたター君は、あれ、と思いました。何かがおかしい、とも感じました。

ター君は両手で目をこすり、もう一回チーちゃんの家を眺めました。そして、何がおかしいかが、ようやく判りました。

チーちゃんの家は、簡素な木造建築の家です。間取りは3LDKと、可もなく不可もない家です。ター君も、自分の家より広いなあ、と感じるだけで、特に目立つ所のない家です。雑草がキレイに抜き取られている庭にはミモザが植えられていて、春にはとてもキレイな花を咲かせます。あんまりキレイなので、ター君は二、三回、花をつもくと木に登ったくらいです。

そんなどこにもあるようで、決してどこにも無い家が、何故か寂れていたのです。

家についている全ての雨戸が閉められていて、雨戸のついていない、庭に出るガラス戸には、中が見えないように、カーテンが閉められていました。庭には今まで一本も生えていなかった雑草が、うっとうしいほど生えています。

変わっていないのは、ミモザの木くらいでした。未だに、ミモザの花がキレイに咲いています。

そんな光景を見たター君は、胸がしめつけられる感じがしました。それはター君が飼っていた猫が、いつの間にか帰って来なくなった時の気持ちと、どこか似ていました。

半年前のあの時、ター君は家中を捜して、近所の家の周りを捜して、となり町の手前まで捜して、夜になっても捜していました。そこまで捜して初めて、もう帰って来ないんだ、と感じました。

チーちゃんの家を見た時に思えた感情は、その悲しい気持ちに似ていました。

そんな気持ちの吐き出し方を知らないター君は、ただただ涙を流し始めました。そして、そのまま自分の家に帰って行きました。

家に帰ると、ター君のお母さんは、自分の子供の異変に気が付い

て、どうしたの、と声をかけました。しかし、ター君は泣くだけしかできません。何度も、どうしたの、どうしたの、とたずねても、ター君は泣いているばかりです。

ター君はお母さんの呼びかけに応えようと、頑張つて涙を止めようとしました。けれど、それはできません。まるで、心という蛇口がひねられて（しめつけられて）、涙という水を流しているようにした。どうにかして蛇口をしめようとしても、ター君の力では少しも動きません。

ター君のお母さんは困り果てて、仕方なくター君を抱きしめました。ター君はお母さんの胸に顔をうずめても、まだ泣いていました。何分かその体勢をとっていると、ター君はいつの間にか泣く事に疲れて、眠ってしまいました。ター君のお母さんは、やれやれ、とため息を吐いて、ター君を抱き上げました。そして、そのままリビングのソファアームの上まで持つて行き、ゆっくりと降ろしてあげました。

ター君のお母さんは、ター君の涙のあとを指で軽くこすつてあげました。そして、おやすみ、と優しく言葉を投げ、リビングを出て行きました。

ター君は静かに寝息をたてています……

ボクははしつた。がんばつてはしつた。ボクのむねがいたくなつたけどはしつた。だけど、おいつけない。

なんかいもボクは、「チーちゃん」ってよんだ。だけど、チーちゃんはへんじをしなかった。ずっとくちをとじたまま、かなしそうにボクをみていた。

チーちゃんのとおりには、むかしかっていた、ねこのノノがいた。はいいろのからだにあおいめをした、いなくなつたときのままのノノがいた。

ボクは「ノノ」ってよんだ。チーちゃんとおなじくらいよんだ。だけど、チーちゃんをよんだときといっしょで、ノノもへんじをしなかった。いつもみたい「ナー」ってないてくれなかった。

だからボクははしった。なんかいもころびそうになった。いきをするのがつらくなってもはしった。

それでもやつぱり、ボクはつかれた。ボクの中から、ボクのいうことをきかなくなった。ただ、かなしい、ってことはわかるみたいで、めからなみだがでてきた。ボクはそのままたおれて、なきだした。

「チーちゃん。ノノ」

さいごのちからをだして、ボクはおおごえでよんだ。そうすると、やっとチーちゃんだけが、へんじしてくれた。

「ターくん、あたしのいえにきて。あたしのいえに。」

ターくん、ぜったいにきてよ。あたし、まってるからね

ターくん、かえらないでね。さつきみたいに、かえらないでね。

ターくん、やさしいから、きつときてくれるよね。

やくそくだよ、ターくん。ぜったいにきてね。

ターくん、やくそくだよ?」

ター君は、チーちゃん、と叫んで目が覚めました。ター君が寝ていたソファアは、汗と涙でぬれていました。ター君は今まで、夢を見ていたのです。

ター君は、さっきのは夢なの、と考えました。チーちゃんが言った言葉が、頭の中で繰り返されていたからです。

さっきのはユメなの? ほんとうにそうなの? だけどチーちゃんはボクにやくそくしたよね? あれはほんとうにユメだったの?

ター君は難しいことは考えられません。けれど、ター君は必死に考えました。もしかすると、これから先、同じくらい考えることはな

いくらい考えました。そして、一つの答えを出しました。

ター君はソファーから降りて、家から飛び出して行きました。ター君のお母さんは、どこに行くのター君、と呼びかけましたが、ター君は聞こえないように、走って行きました。

ター君は、チーちゃんの家に向かっています。

ター君がチーちゃんの家に着いた時、夕陽がもう沈みかけていました。辺りは暗くなって、人もほとんどいません。

そんな所に建つチーちゃんの家は、ター君が帰った時よりも、寂れているような感じでした。ミモザの木にはカラスが一匹とまっていたので、寂しげというよりも、魔王の館にも見えません。

そんな家を見たター君は、帰ろうか、と悩みました。チーちゃんの家はおっかないものには見えません。それでもター君は、チーちゃんが待つてる、と自分に言い聞かせ、おっかない家の中へ入って行きました。

カラスはター君が家に入った時、カー、と鳴きました。まるでター君のことを笑うように。

家の中はとても不思議でした。空気はどこか冷たく、しめつています。リビングに続く廊下は、赤い点がいくつもありました。どちらにも、ター君が前に来た時には感じられなかったものです。

ター君はそれを体で感じてしまいました。だからター君の中では、帰ろうかな、という気持ち、どんどん大きくなっていました。けれど、ヤクソクがある、その気持ちだけが、ター君をおっかない魔王の館を歩かせました。

そしてター君は、リビングに入りました。

リビングには、暗くてよく判らないけれど、何匹か猫がいました。猫は大きいものから小さいものまで、たくさん猫がいました。そしてその猫たちの中に、大きな人と小さな人がいました。それはター君のよく知っている二人でした。

それはチーちゃんと、チーちゃんのお父さんでした。顔が青く、服が赤いけれど、確かにチーちゃんと、チーちゃんのお父さんでした。

チーちゃん、とター君は叫びました。チーちゃんは家にいたんだ。ター君の頭の中は、チーちゃんに会えた嬉しさでいっぱいです。ター君は嬉しさのあまり、チーちゃんの手に触れました。しかし、ター君は思わず触れた手を戻しました。

ター君が触れたチーちゃんの手は、まるで氷のように冷たかったです。

ター君は不思議になりました。チーちゃんが冷たいのです。誰でも疑問にはなりません。けれど、ター君はもう一回触りました。ここで手を離れたら、もう会えない気がしたからです。

冷たさがター君の手に流れてきます。だんだんと手が痛くなってきました。けれど、離しません。ター君はチーちゃんの手を強く握りしめています。

チーちゃんは微笑みました。ター君を見て、微笑みました。チーちゃんのお父さんも、チーちゃんにつられるように、どこことなく笑っています。猫たちも、ター君たちを見て、鳴き出しました。まるで祝福するように鳴きました。

ター君は、そんな皆を見て、とても嬉しくなりました。もう、チーちゃんの手も冷たくありません。それどころか、温かく感じます。

ター君は、皆に屈託のない笑顔を見せました。

今日、市内のとある住宅で、大量の死体が発見されました。死体として発見された方は、家主の城島健司さん二十六歳と、

その長女である千里ちゃんちさと五歳、そしてその近所に住む加藤高志かとう たかしちゃん四歳です。

死体となった城島さんとその長女は、鋭利な刃物で首を切られていて、二人は出血多量による失血死。高志ちゃんの死体には目立った外傷はなく、現在死因を究明中です。また、住宅内には白や黒や灰色の猫の死体も散乱していて、それらもまた失血死のようです。

警察は現在、行方不明である房子さんふさこを犯人と断定し、捜索している模様です。

続いてのニュースです

(後書き)

感想などありましたら、是非とも一報をお願いします

ター君とチーちゃん

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0136c/>

ター君とチーちゃん

2008年11月7日06時32分発行